

次期衆院選

投票でけん制、監視を 青木理

菅義偉首相が総裁選への不出馬を表明し、永田町もメディアも政局一色の様相である。この国の最高権力者たる次期首相を事実上決する争いとなれば、その動向に右往左往するのやむを得ない面はあれ、私は激しく苛立つ。このようないつにかまけている場合か、と。そして、このような状況に陥らせたのはいったい誰なのか、と。

振り返ってみれば、「国民の生命と財産を守るのが政治の使命」とと繰り返し囁き、危機への対応力をことごとく強調してきた安倍晋三前首相は、まさに人びとの命と財産が危機に瀕したコロナ禍で無惨な対応に終始し、その最中に政権を投げ出した。

菅首相は、ある意味で前首相の残り任期の尻拭いを担った。前政権を官房長官として仕切ったのだから当然といえば当然だが、五輪の「一年延期」を決めたのも前首相。おそろしく菅首相に

政治の空転、退廃を作った与党

中止などの選択肢はなく、政権浮揚につながるという打算もあって開催を強行したが、これも無惨なコロナ対策を続けて感染は爆発的に増え、支持率は急落し、手詰まりに追い込まれた末に、またも政権は投げ出された。

結果、永田町は国会も開かず、感染対策の鍵を握るワクチン担当相までが



2020年8月、辞意を表明した記者会見を終え、引き揚げる安倍首相。左は菅官房長官＝首相官邸で(肩書は当時)

あおき・おさむ 1966年、長野県小諸市生まれ。90年に慶応大を卒業し、共同通信社に入社。東京社会部でオウム真理教事件などを取材。ソウル特派員などを経て2006年にフリーランスに。主な著書に『日本の公安警察』『日本会議の正体』『安倍二代』など。



『日本の公安警察』『日本会議の正体』『安倍二代』など。

出馬に意欲を示し、政局モード一色に染まっている。新総裁が決まるのは今月二十九日。その後に臨時国会を開いて衆院を解散することになるのか、いずれにしても衆院選に向け、来月いっぱいにはコロナ対策そっちのけの政治空白が続かかねない。

あらためて記すまでもなく、いま全国各地は巨大な感染第五波に襲われ、その収束は杳として見えない。首都圏などでは医療が崩壊状態に陥り、自宅で放置状態となっている人はなお数方の単位。医療にアクセスさえできずに亡くなる人も続出している。

なのにその原因を作った前首相らがまるでキングメーカーを気取り、二カ月も政治を空転させ、テレビを中心としたメディアはその政局報道に踊りはじめている。それを日々見せつけられれば、社会心理学用語でいう「単純接触効果」は確実に生じるだろう。繰り返し接すると好感度が高まり、表紙を変えざる清新性効果も現れる。

それが自民党の狙いであり、しぶとさでもあると皮肉のひとつも言いたくなるが、こうした状況を作った責任を当の面々はどれほど自覚しているのか。その片棒を担ぐことにメディアはどこまで自覚的か。

さらにもいえば、一般の政権放擲によって本来総括されるべきは、九年続いた安倍・菅政権の功罪でもあるだろう。コアな支持層に支えられた面はあるが、一方でこの国の統治機構は著しく劣化し、根腐れもした。

国会を軽視し、憲法を蔑ろにし、説明もせず責任もとらず、口を開けば嘘や詭弁ばかり。放埒で強権的な人事で霞が関は忸度と、官邸の顔色ばかりうかがう「ヒラメ化」の風潮に席卷され、だからたとえば公文書は隠され、棄てられ、果ては政権の都合に合わせて改ざんされた。すさまじいまでの退廃である。

権力行使への謙抑性薄き「一強」政権の長期継続がこうした状況を生み、コロナ対策でも一貫して無惨な失敗を繰り返したのだから、それを支えてきた与党の面々にもっと冷ややかな眼を向け、単なる表紙の架け替えに踊らされず、強大な与党を力強く牽制・監視できる勢力を育てねばならない。それをまもなく訪れる衆院選の投票行動につなげ、この危機の最中に長期の政治空白を生じさせた者たちに突きつけること。でなければ、この国の政治もコロナ対策もさして変わらないと私は確信している。